

取り交せしとき預づかりたる文を持ってりとして、薫に奉つる。薫は之を見て、落ち散りたらしましかば、いかに耻がましからんと、笑止に見給ひき。

(四十六) 椎本卷

薫中將は八の宮の姫君達が事を匂の宮に談しければ、色ふかき匂宮は泊瀬に詣で給ふに託して、宇治へ中宿りせん爲め、出で給へり。公卿殿上人も御供せり。薫中將もおはします。やがて宇治にて宿る。薫は八の宮に至る。匂宮は輕々しく出られ給はねば、姫君へ文つかはしけり。此の秋薫中納言に成れり。宇治へ渡る。八の宮ことに喜びて、無からん跡には、姫君

見捨てず、訪ひ給へなどいふ。薫はじめ、姫君をのぞき見しより、道心もさめて、いかで之を我物にと思へど、一たび道心に心を傾けしといふ身にて、今さら然ることを云ひ出でんも、愧づかしとて、色にも出さず、八の宮は七日行ひ給ふ結願の日にかくれ給へり。薫は八の宮の遺言もあればとて、たびたび渡り給ふて、姫君と物語りなどし給へり。

(四十七) 總角卷

薫八の宮の老女、辨を召して、姫君のことをたのみ、よき御有つきもがなと思ふ。薫心の中には中の君を、匂宮へ参らせ、大君を自らはと思へり。辨を語らひて、大君と對面の程に、忍

びがたき心を、語り聞こゆれば、大君はかゝる御心を、年頃押
 しかくして、實にもてなし給ひしよと、おぼすにはづかしう
 なりぬ。大君今歳二十六なれば、若きといふ程にあらず、わけ
 て薫は若かく美しくしければ、いかで見えんとおぼしけり、さ
 れど御内の人々は、薫に大君、匂ふに中の君と思へば、心を合
 せて、或夜かほるを、姫君のふし給へる方へ入れ奉つる、大君
 は之を知りて、隠くれたり、中の君は残り、薫は姉の君との
 み思ひつるに、妹の君なりければ、出しぬかれたりと、耻づか
 しくうらみけり、兎角中の君あれば、我が戀ならむと、薫は思
 案し、こたびは匂宮を同車せしめて、中の君に忍ばせ、己れは

又大君に對面して、匂宮の遁れがたく恨らみ給ふ、敵今宵
 同車して侍る、辨ぞ知るべし、中君にあはせ奉りけん、今は
 思ほしかはりて、我がいはんまゝになり給へど、いろくゝに
 かきくどけど、遂に其の甲斐なし、やがて大君は病にかゝり
 て、失せ給ふ、薫のなげき一方ならざりき、

(四十八) 早蕨巻

中の君は姉君かくれて、悲しさ云はん、方なく、涙にのみ明か
 し暮らせり、薫は大君を我がものにもせず、空しくなしたる
 を嘆きけり、匂宮は近き程に中の君を引き取らんと、思ふ
 旨を、薫に話す、薫もいと悦びて、萬づ其の準備をなし給へり、

明日京へ渡り給はんとする前日、薫宇治に渡りて、中君に物語りなどする序に、吾れこそ先きに姉君をかゝく迎へんと思ひしに、など語る哀れげなりやがて二條院へ移れり、薫は見るにつけても、我が物にせざりし、くやしさを、月日に添へていや増しける。

(四十九) 宿木巻

夕霧は己れが娘の婿に、匂宮を取らんと定め給ふ中、の君は之を聞き、數ならぬ身なれば、人笑はれにやなりぬべきと、嘆げかはしけれと、色にも出し給はず、五月雨よりたゞならず、なり給ひて、ものなともきこし召さず、臥してのみ居れり、薫

は之を見て、いとをしきかな、色におはする宮なれば、珍らしき方に心うつらんも知れず、吾は如何なる心にて、彼の君を匂宮には譲りたるぞ、口惜しく思へりやがて二條院へおはして、中君に對面して、物語るに、猶よく姉君に似給ふかなと思ふに、悲しさぞまさりける、匂宮は夕霧の方に渡り給ふて後は、二條院へは心やすくも得わたり給はず、中君はいとと思ひ亂れて、宇治へ歸へらんと思ほし、薫に相談せば、やどて、迎ひ差し出すやがて、薫は來たれり、薫は我がものにせざりし、口惜やしさを語らん、よき折りぞと思ひて、差し寄りて、心の内をさまざまに云ひつゝ、け給へば、怪やししく愧づか

しう、打ち嘆げきておはす、曉近かければ、人もあやしまんとて、薫は立ち出でけり、其の、ち又しめやかなる夕暮に、中の君を訪ひ給ひて、例の心の中をの給ひつゝ、昔の人の御像を繪にかゝせましと思ふなど、語る中の君さの給ふにつけて思ひ出だせり、此の夏遠き所より尋ね來れる人の怪やしきまで、姉上に似たるが侍べり、繪にかゝせて見んと思す心なれば、之を奉らんと給ふ、薫はくわしく聞けども、ありのまゝには返へず、辨の尼につきて之を聞くに、八の宮の御脇腹の娘の由答ふ、薫折を得て之を見給ふに、誠に大君によく似たり、懐つかしく思ふて、よび取らんと決心せり、この娘を

浮舟の君といふ

(五十) 東屋巻

浮舟の姿を匂ふ宮見給ひて、例のあだなる心より、見過ごしがたく、側にさし寄りてかき口説き給へり、乳母人に遮ぎられて、其の意を遂げずに歸りぬ、薫は又さまざまに浮舟のことと思ひ亂れて、おはしけり、辨の尼を語らひて色々に力を盡くせし甲斐ありて、のどやかに語らひ、心の中を聞こえ給へば、浮舟も艶なるもてなしに、よろづ慰さめけり、

(五十一) 浮舟巻

匂ふの宮は、浮舟のと忘れず、心にかけ給ふ、近頃薫、宇治に

再々渡給ふと聞けば、もしや我が思へる人にはあらずやと、見定めたくおぼす、内記官を語らひて、匂宮は人知れず京を出で、宇治へ忍び給ふ、内記よく案内知りて、導びき格子のすきよりのぞき見れば、まがう方なき浮舟なりけり、腕を枕にして灯を眺め居たり、物纏ふ人三四人あり、右近といふ女ねふたしとて、纏ひさしたるもの、几帳に打ちかけて、浮舟のあと近かく臥す、残りの人もねしづまる、匂宮は寐入りたるを見すかし、格子を叩き、こわづくり仕給へば、右近聞きつけ、薫のおはしたりと思ひて、格子をあけ、匂宮は這入りて、薫に似たる聲を、まねび給へば、匂宮とは思ひもよらず、かぐ

はしき身の匂ひも露たがはねば、誠の薫とぞ右近は思ひける、匂は入り給ひて、いと馴れ顔に臥し給へり、浮舟はあらぬ人なりと思へど、聲だにせず、匂宮と知るに、姉婿なれば、いといせん、なし、夜は明けたれど、歸り給はず、右近もあきれて、煩はしと思ふ、これより匂宮は薫にかくれて、浮き舟に通ひ給ふ、薫はかくとも知らず、卯月十日に京へ迎へんといふを、大内記匂宮に申せば、匂宮は三月晦日に、盗すみ出ださんと定めて、云ひやり給ふに、浮舟今はいかになるべき身ぞと、心苦しく、亂れけり、兎にも角にも、このまゝあらんには、耻多しと、浮舟は身のよるべなく、遂には身を投げんと思ひ定めたり、

(五十二) 蜻蛉卷

宇治には浮舟の行衛も知れず成りにしかば、人々打ち騒ぎ
けり、右近は匂の御事につき物のみ思ほしたれば、若しや身
を投げ給ひしにはあらずやと語るに、然らば死骸のあるや
うにして、葬禮せん、死骸もなしと云へば、人聞きわるきのみ
ならず、薫も疑がひて、匂の宮と心を合せ隠くれたりなど、
思はれんは後ろめたしとて、葬式を營めり、薫は浮舟死せり
と聞いて、げに此の兄弟につき物思ふ身なりと、心うく思へ
り。

(五十三) 手習卷

横川といふ所に、何某の僧都といひて、貴とき人ありけり、八
十餘の母五十ばかりの妹あり、願有りて、初瀬にまうで歸へ
るとて、道に母の尼惱みたれば、宇治に宿らんとて、宇治の院
といふ所をかりて、入りけり、山へかく云ひ遣りたれば、僧都
來れり、常に人住まぬ所には、怪物あるもの也、能く見よとて、
此處彼處を見るに、森のやうに見ゆる木の下に、白き物ひろ
こりてあり、近くより見れば、髪は長くつや／＼しき女なり、
白き綾の小袖に紅の袴着けて、あでなる様限りなし、助け起
して連れかへり、色々介抱すれば、人心地になれり、これ即ち
浮舟なり、扱ても浮舟は身を投げんとて、出でけるが、風はげ

しく川波もあらく聞こえて恐ろしければ此の處まで來りて、疲かれの爲めに覺えず失心して倒れ居たるなり助け上げたる母の尼は此の程娘を失なひたれば此の浮舟を其の娘の歸へりしとていと寵愛して養なひけり浮舟今は世に望みなき身なればとて遂に尼となりけり其の後薫は浮舟の尙ほも此の世にあるを聞き今は呼びかへすべきものは思ひ給はぬと明け暮れなげく浮舟が母に告げんと思ほす、

(五十四) 夢の浮橋

薫は横川に至り彼の僧都に面會して浮舟が事を尋ね給ふ

に其の人なりければ供に召したる浮舟が弟の小君を呼び文をつかはせり浮舟は此の文どもを尼君にさし出して云ふかゝること更らに覺えたることなし今日の小君の顔弟に似たるやう思へど何事もたしかならずいと怪やしき事どもに心亂れてなやましとて打ち臥し給へり尼君小君にしかくの由語りて今日は先づ歸へり給ひ重ねて渡り給へといふ小君せんなく歸り其の由申せば薫はありしにも勝さりて覺束なうおぼせしといふ

紫式部終

明治二十九年十一月五日印刷
明治二十九年十一月八日發行

(定價金十五錢)

發行者 渡邊爲藏
東京市京橋區日吉町四番地

印刷者 高田乙三
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

發行所 民友社
東京市京橋區日吉町四番地

印刷所 株式會社 秀英舍
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

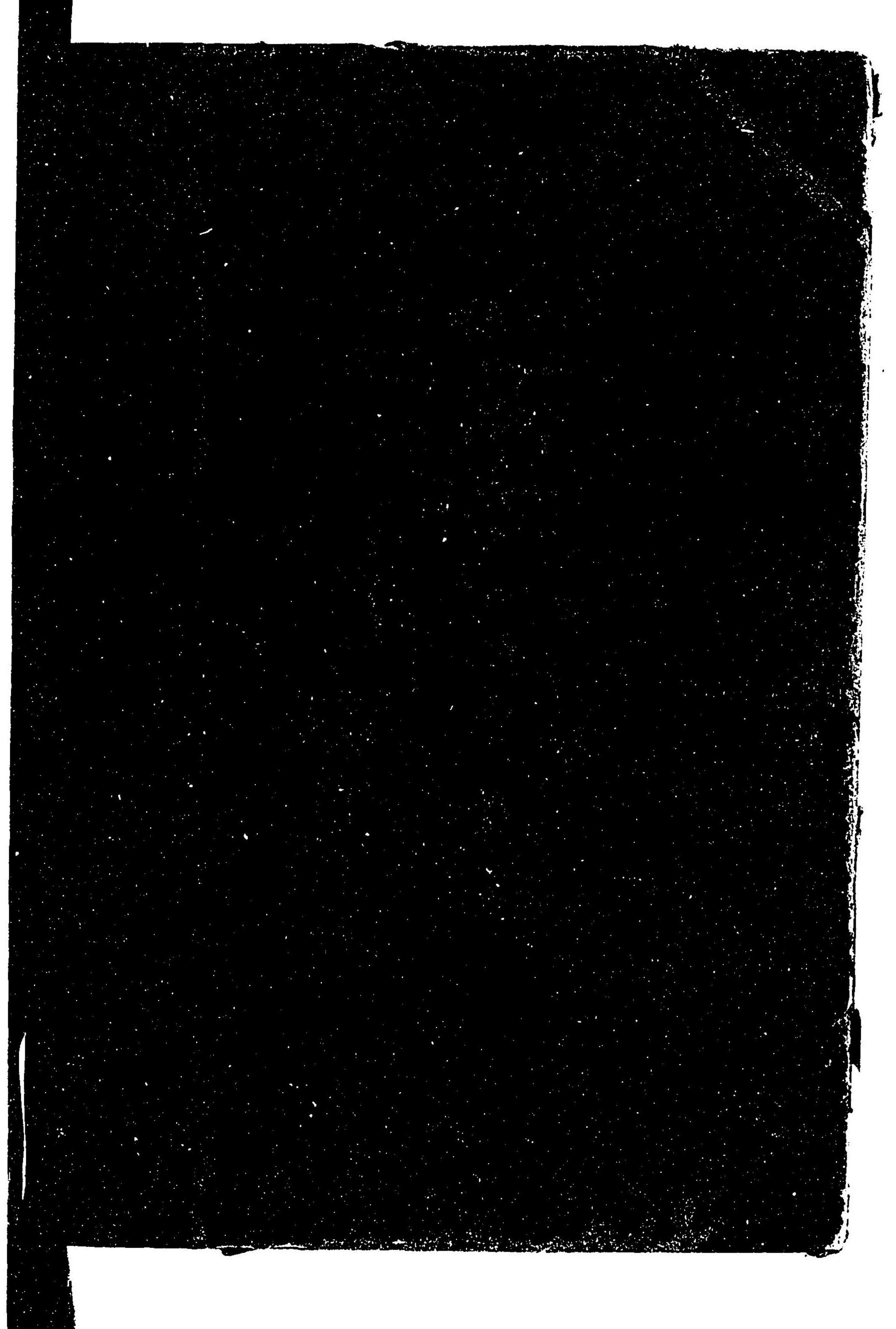
版權
所有



110 1

0/11

77
225



085034-000-1

71-225

紫式部

綠亭主人/著

M29

DBB-0466



15.4.20